

パレスチナに出会う

—ヨルダン川西岸で学んだ1年—

Discovering Palestine:

A Year's Study in the West Bank

東京外国語大学外国語学部 渡辺 真帆

キーワード：パレスチナ、アラビア語

はじめに

パレスチナに、留学。なぜわざわざ危険な紛争地に行くのか。いったい何を勉強するのか。そもそも大学なんてあるのか。疑問に思う人がいるかもしれない。パレスチナがどこにあるのかわからない、という人もいるだろう。

私は2013年8月から2014年9月まで、パレスチナ自治区のヨルダン川西岸地区（以下、西岸）にある、ビルZeit大学(Birzeit University)に留学した。留学の主目的はアラビア語の上達であったが、語学やアラブ地域研究だけでなく、中東政治や国際関係の観点からパレスチナに関心を持つ人にも、ぜひ留学先として勧めたい。

なお、本稿で述べる情報はすべて、上記期間における一個人の体験を基にしている。外国人の入国やビザ取得を含めた同地域の状況はきわめて流動的であるため、留学や渡航を検討するには必ず最新情報を参照してほしい¹。

土壇場でパレスチナへ

私は東京外国語大学外国語学部でアラビア語を専攻している。アラビア語は中東・北アフリカの20カ国以上で使用されているが、地域による方言の差が大きい。方言を日本で学ぶ機会は限られているため、これを現地で勉強することで会話力を磨きたいと考えていた。

当初はエジプトへの留学を希望していた。3年後期から4年前期にかけて、カイロ大学に交換留学生として派遣され、日本学生支援機構の留学生交流支援制度奨学金を受給することが決まっていた。ところが渡航予定の約2カ月前、2013年6月末にエジプトで政変が発生した。たちまち情勢は不安定

化し、外務省の渡航情報でカイロの危険レベルが引き上げられ、予約していた飛行機の便は運休になった。カイロ大学への派遣留学は、直前に中止を余儀なくされたのである。

それでもアラビア語圏への留学をあきらめきれず、大学を1年間休学して私費で留学することにした。候補地にはヨルダン、レバノン、パレスチナ、チュニジア、モロッコなどがあった。限られた時間でのリサーチは決して十分とは言えなかったが、当時留学していた先輩の勧めもあり、パレスチナ自治区西岸のビルゼイト大学を選んだ。東京外国語大学とビルゼイト大学は学術交流協定を締結しており、渡航前に手続きを行うと、休学留学中に取得した単位の認定を帰国後に申請できる。私はこの制度を利用することにした。

私費での留学のため、入学手続きはすべて自分で行う。2013年のビルゼイト大学留学生プログラムは、秋学期の開始が8月末であった。出願を決意したのが遅かったため、願書の締め切りが目前に迫っていた。応募に関する情報はウェブサイト上にすべて英語で公開されていた。志望動機文、推薦状、成績証明書等の必要書類を急いでそろえ、入学金を送金し、どうにか期限内に出願することができた。応募手続にアラビア語が要求されることはなく、ビルゼイト大学側とのやりとりもすべて英語で行った。パレスチナの郵便事情のためか、渡航前のお申し込み手続はメールのみ。対応は素早く、1週間強で入学許可証が発行された。事務手続の態勢が整っている印象を受けた。

休学手続、旅行保険の申し込みなど、日本側での準備も大急ぎで間に合わせ、あっという間に出発日を迎えた。パレスチナに行くのは初めてだった。

留学ビザはない

パレスチナ自治区に行くには、国境を管理するイスラエルの入国審査を通過しなければならない。私はイスタンブール経由で、イスラエルのテルアビブ郊外にあるベングリオン空港に到着した。パスポートに入国スタンプは押されない。代わりに顔写真入りの小さなカードが発行される。これが3か月間有効な観光ビザだ。このビザで、パレスチナ自治区の西岸にも入ることができる。観光ビザで入国したのは、留学ビザの申請が間に合わなかったからではない。理由はパレスチナ・イスラエルの政治状況にある。

ビルゼイト大学がある西岸は、1967年以降イスラエルの占領下にある。西岸に外国人が入ることをイスラエル当局は禁止こそしないが、歓迎もしない。パレスチナ自治区の大学で学ぼうという者に、留学ビザは発給しないのである。そのため留学希望者は、観光ビザで入国し3か月以内に出国、継続したければ再入国する。残念ながら出入国を繰り返すうちにあやしまれ、3か月未満のビザしか発給されなかったり、入国を拒否されたりした外国人もいる。こうした政治的理由のために長期の計画が立てられないことは、パレスチナ留学の最大の難点と言える。それは同時に、この土地の人びとが生きる日常のほんの一端を、よそ者の私たちが体感するということでもある。

名門、ビルゼイト大学

ビルゼイト大学は、西岸中部の行政都市ラーマッラー（ラマラ）郊外に位置する。ラーマッラーの中心からワゴンタイプの乗り合いタクシーに乗り、20分ほど走ると、丘の上に白い建物が立ち並ぶキャンパスが見えてくる。傾斜のきつい坂を登りきると、黄色いワゴンであふれる駐車場に着く。次々に学生がワゴンから降り、門を通過して大学構内に入っていく。



写真1：ビルゼイト大学に向かう乗り合いタクシー（筆者撮影）

キャンパスは活気に満ちている。ビルゼイト大学は文理9学部からなる総合大学で、学生数は学部と大学院を合わせて約1万人。女子学生が3分の2近くを占める。カラフルなヒジャーブをまとう子もいれば、髪を隠さない子もいて、空き時間にベンチに座っておしゃべりする彼女たちの装いは華やかだ。男女のカップルも多く目につく。街中では家族や親戚の誰に見られるかわからないが、大学では羽を伸ばせるらしい。

パレスチナの大学受験は、日本のセンター試験のような全国统一試験の正答率で合否が決まる。西岸には短大を含め30校以上の大学があるが、ビルゼイト大学は其中でも合格最低正答率が高い、難関といわれる。



写真2：ビルゼイト大学キャンパス内（筆者友人より提供）

留学生プログラム

私が在籍したのは、同大学のPAS (Palestine and Arabic Studies) プログラムだ。外国人を対象に、アラビア語と、パレスチナやアラブ関連の社会科学の授業が開講されている。アラビア語は正則語と口語エルサレム方言の2コースがあり、それぞれ4段階、3段階ずつの習熟度別クラスに分かれている。既修者は授業開始前にクラス分けテストを受ける。私は日本で2年半勉強していたため、正則語レベル4、口語レベル3に振り分けられた。クラスメートはアメリカ人、ドイツ人、フランス人、スウェーデン人など、欧米諸国出身の学生が大多数であった。授業は原則アラビア語で行われるが、英語圏出身の学生が多いためか、先生によっては英語を用いて説明することもあった。正則語は4人、口語は10人の少人数クラスで、留学初期にまとまった量の勉強ができたことは幸いであった。

社会科学系の授業は、パレスチナ問題、近現代アラブ思想、アラブ社会論、アラブ世界における女性、パレスチナ社会論、パレスチナ文化論がシラバスにあり、各学期で開講されるのはこのうち2科目であった。授業は英語で行われる。とりわけ看板科目といえるパレスチナ問題の講義が面白かった。第一次インティファダに学生として参加し、投獄された経験もあるパレスチナ人教授が語る当地の歴史。質疑やディスカッションも毎回白熱し、刺激的な授業だった。

授業のほか、希望すれば留学生一名に対しパレスチナ人学生一名が、アラビア語の会話を練習するパートナーとして付く。教科書では習わない口語の表現を教えてもらったり、面白いテレビ番組を教えてもらったりと、会話パートナーには何かと助けてもらった。彼女とは大学外でも仲のよい友人となり、犠牲祭の休暇中に自宅におじゃましてごちそうを頂いたこともあった。

PAS プログラムは、秋・春・夏の3学期開講されており、秋と春が3カ月間、夏が1.5カ月間の集中コースである。各学期が3カ月以内と短いのは、留学生が観光ビザで滞在するためである。学期間が空くので、一度帰国し次の学期の開始に合わせて戻ってくるヨーロッパ出身の人や、近隣諸国を旅

行する人もいた。私はなるべくパレスチナにいたかったので、一週間ほど隣国ヨルダンに出国して戻り、パレスチナ・イスラエル内の旅行や、文化センターでのボランティア、アラビア語の個人レッスンなどに時間を活用していた。

なお、私が在籍していた当時は昼間コースのみであったが、2015年3月現在、PASプログラムはアラビア語のみ夜間コースも開講している。ラーマッラーには国連機関や各国政府系開発機関、NGOなどで働く外国人が多く、仕事をしながらアラビア語を学びたいという彼らの需要に応えた形だ。いわゆる留学ではないが、西岸でボランティアやインターンをしながらアラビア語を学ぶのもよいだろう。

お部屋探し

ビルゼイト大学には学生寮がない。地方出身のパレスチナ人学生の多くは、近くのビルゼイト町にアパートを借りて住んでいる。一人用の物件はほとんどないため、数人でシェアするのが一般的だ。PASプログラムは希望する留学生にビルゼイト町のアパートを紹介している。ビルゼイトは小さな町で、商店もあり食料など必需品はそろろうが、ラーマッラーのような繁華街はない。私は大学の近さより、市場やショッピングモール、バスターミナルなどあらゆる中心に近いことを優先し、ラーマッラーに住むことにした。

初回のビザ更新までの3カ月に住んだ部屋は、留学していた日本の大学の先輩に紹介してもらった。3階建ての一軒家に寝室が6つあり、パレスチナ人と外国人の女性が多いときで計6人住んでいた。家具は一通りそろっていて、キッチンや洗面所、洗濯機は共用である。次に住んだ家は、ラーマッラー在住外国人向けの情報が配信されるメーリングリストで見つけた。毎日投稿される物件情報からいくつか候補を見繕い、大家に連絡して見に行った。同時期に部屋を探していたアメリカ人女性にも同メーリングリストを通じて知り合い、彼女と寝室が2つある家に入居した。私より一歳上の彼女は、アラビア語が上手く西岸を知り尽くしていて、生活を共にする中で多くを教えてもらった。4カ月後にもう一度引っ越しをすることになり、今度はアラビア語の物件情報サイトで見つけた家族用の広いアパートに、前出のハウスメイトと、別のアメリカ人の友人と3人で入居した。

ラーマッラーでの部屋探しのポイントは、中心部へのアクセス、近隣の雰囲気、大家の人柄に加え、インターネット環境があるか、シャワーのお湯は出るか、夏場は水の供給が十分か、冬場は暖房設備が整っているかが特に重要である。西岸の水源のほとんどはイスラエルが管理しており、供給が不安定である。どの家の屋上にも黒いプラスチック製のタンクがあり、給水のあるときに水を溜め、ないときは溜めた水を使っていく仕組みだ。自然と節水を意識するようになった。お湯はタンクの水を太陽光であたためたり、ボイラーで沸かしたり、電気温水器を使ったりと、家によって方式が異なる。また西岸の冬は寒く、雪も降るので、暖房は必須だ。こうした設備は各戸にばらつきがあるため、自分の目で見て確かめるのが得策だ。



写真3：アパートのベランダから。ビルの屋上に黒いタンクが見える（筆者撮影）

パレスチナと日本、演劇の共同制作

留学中、多くのパレスチナ人、外国人、日本人に出会い、大学内外で様々な活動に関わる機会に恵まれた。ここでは私の留学の集大成となった、パレスチナと日本の演劇人による共同制作プロジェクトについて述べ、本稿を締めくくりたい。

2014年2月、日本の演劇関係者がラマッラーに来ているとの知らせを受け、連絡を取ってお会いすることになった。聞けば、日本の演出家やスタッフとパレスチナの劇団が一緒になって新作を作り、11月に東京で開催される舞台芸術祭で上演する計画だという。その打ち合わせのために、ラマッラーのアル＝カサバ・シアターを訪れていたのだ。パレスチナ側の芸術監督が提案した題目は“Rashomon”。どうやら黒澤明監督の映画『羅生門』のことを言っていて、芥川龍之介の『藪の中』がストーリーの中心らしい。演劇の知識は皆無だったが、パレスチナと日本が接するプロジェクトに興味をわき、通訳として参加させて頂くことになった。

半年後の8月、同じパレスチナ自治区のガザ地区では、イスラエル軍による空爆と地上侵攻が激化し、パレスチナ抵抗勢力による攻撃も続いていた。西岸とガザは地続きになっておらず、ガザは封鎖されているため入ることができない。日ごとに犠牲者が増えていく様子を、ニュースで追うことしかできなかった。

そんな頃、日本の演出家とドラマトルクが西岸にやって来た。アル＝カサバ・シアターで例の新作に出演するパレスチナ人俳優陣とワークショップを行うためだ。最初の一週間は、毎朝一人ずつ時間をかけて自己紹介した。出身地のこと、家族のこと、演劇のこと。半生を語る俳優たちの言葉のひとつひとつを聞きもらさないよう、全神経を集中させた。何度か聞き返したり別の言葉で説明しても

らったりしながら、伝わるよう必死に通訳した。自分たちのことに始まり、パレスチナのこと、日本のこと、世界のこと。対話を重ねじっくり議論しながら、お互いの、そして戯曲の理解を深めていった。毎日帰るとぐったりするほど疲れたが、初めて関わる演劇の現場は楽しかった。アラビア語の面では、自分ではない他の誰かの言葉を代弁することで、語彙や表現が増えるのを感じた。20日間の日程を終え、日本のスタッフ2人は帰国した。

9月末、私は13カ月ぶりに帰国し、数日後にパレスチナ人俳優たちが来日した。通勤ラッシュ、地下鉄、コンビニ。久しぶりの日本は、初めて来た彼らと再発見していくようで、新鮮に感じた。東京での稽古には美術、振付、音響など大勢の日本人スタッフが加わった。上演はアラビア語で行われ、日本語字幕が付く。あらゆる人の思いが伝わるよう、私はひたすら言葉と格闘し続けた。遠く離れた場所で生きる人間どうしが出会い、空間と時間を共有する。試行錯誤を繰り返しながら、少しずつ作品が形になっていく。この過程に立ち会うことができ、アラビア語を学んでよかった、パレスチナに行ってよかったと心の底から感じた。

11月上旬、公演は無事に千秋楽を迎えた。喜びや達成感より、終わってしまった寂しさが強かった。帰国するアル＝カサバ・シアターの一行を見送りに、空港へ行った。再会を誓い、しばしの別れ。保安検査場のゲートに吸い込まれていく彼らの背中を見届けながら、パレスチナ留学がもたらしてくれた数々の縁に、感謝した。

¹入国やビザ発給に関する公式情報は限られています。渡航予定の方には筆者が知り得た情報を提供します。『留学交流』編集部にご連絡ください。